

令和6年12月13日

一般社団法人 日本秘湯を守る会

## 移動の足の実態について

## &lt;はじめに&gt;

「秘湯の宿」と言われる温泉宿については、最寄り駅からでも70キロ以上離れているような場合もあり、公共交通機関の使用だけでは不便な宿が多くあります。レンタカーや自家用車の使用が可能であれば来訪も容易かもしれませんが、比較的需要の多い高齢の方は免許の返納などの為、交通手段に乏しいのが実情です。これらの「移動の足」の不足は温泉宿側にとっても死活問題となっています。

## &lt;現況&gt;

各宿で無料送迎等を実施しながら対応はしていますが、従業員の雇用の確保、人手不足などが相まって送迎の持続が限界に達している宿も多いのです。仮に送迎を実施していても以下のような宿も多々あります。

- ① 他の業務との兼ね合いがあり、何往復もできない
- ② 最寄りの鉄道駅からの全行程を送迎できない  
⇒途中にポイントを作って、そこまではタクシー使用、自力で来てもらった上で、そこから無料送迎している
- ③ 従業員での対応ができず、外部タクシー会社に依頼  
この場合  
タクシー会社⇒宿⇒駅(次の送迎客待ちの為、暫く待機)  
といった道程となり、客待ち時間の料金等、運賃以外の料金が発生してしまう為、継続的な依頼は困難

## &lt;今後&gt;

秘湯と言われるような山間地よりは利便性のある温泉地などでは、乗合タクシーやオンデマンドバス等の利用で一定程度の解決をみている地域もあるようです。しかしながら、秘湯があるような山間地の温泉宿においては「移動の足」の不足の問題は非常に深刻であり、早急に「多様性を持った持続可能な移動の足」の確保が必要です。

現況と内容が重複する部分もありますが、現在送迎を担っている宿の主人・従業員といったスタッフの高齢化は如何ともしがたく、今後の展望としても送迎に従事してくれる人材の確保は至難と思われる状況です。秘湯という集客できる材料がそこにあっても、お客様の輸送が安全、且つ安定して行うことができなければ「秘湯」という文化そのものに影響を及ぼすことは言うまでもありません。端的に申し上げれば「移動の足の衰退イコール秘湯の文化の衰退、ひいては途絶えてしまう結果にもなりかねない危機的な状況がすぐそこまで来ているのです。

## (一例)

ライドシェアなどの導入で地元住民の方に駅⇒宿⇒駅の行程で客の輸送をお願いし、費用は宿と利用客の負担とする。温泉宿においては圧倒的に土日等の需要が多い為、その時間のみ送迎に従事してもらえれば送迎の担い手を宿独自で確保する必要はなくなり、住民の方も普段は別の仕事に従事されていても十分可能と思われる。

このような案も「持続可能な移動の足」の多様性・確保につながるのではないかと考えます。

以上